
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 盧生《ろせい》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) [#地から1字上げ] (大正六年十月)

盧生《ろせい》は死ぬのだと思った。目の前が暗くなって、子や孫のすすり泣く声が、だんだん遠い所へ消えてしまう。そうして、眼に見えない分銅《ふんどう》が足の先へついてでもいるように、体が下へ下へと沈んで行く　　と思うと、急にはっと何かに驚かされて、思わず眼を大きく開いた。

すると枕もとには依然として、道士《どうし》の呂翁《ろおう》が坐っている。主人の炊《かし》いでいた黍《きび》も、未《いま》だに熟さないらしい。盧生は青磁の枕から頭をあげると、眼をこすりながら大きな欠伸《あくび》をした。邯鄲《かんだん》の秋の午後は、落葉《おちば》した木々の梢《こずえ》を照らす日の光があってもうすら寒い。

「眼がさめましたね。」呂翁は、髭《ひげ》を噛みながら、笑《えみ》を噛み殺すような顔をして云った。

「ええ」

「夢をみましたろう。」

「見ました。」

「どんな夢を見ました。」

「何でも大へん長い夢です。始めは清河《せいか》の崔氏《さいし》の女《むすめ》と一しょになりました。うつくしいつつまじやかな女だったような気がします。そうして明《あく》る年、進士《しんし》の試験に及第して、渭南《いなん》の尉《い》になりました。それから、監察御史《かんさつぎよし》や起居舎人《ききょしゃじん》知制誥《ちせいこう》を経て、とんとん拍子に中書門下《ちゅうしょもんか》平章事《へいしょうじ》になりましたが、讒《ざん》を受けてあぶなく殺される所をやっと助かって、驩州《かんしゅう》へ流される事になりました。そこにかれこれ五六年もいましたろう。やがて、冤《えん》を雪《すす》ぐ事が出来たおかげでまた召還され、中書令《ちゅうしょれい》になり、燕国公《えんこくこう》に封ぜられましたが、その時はもういい年だったかと思います。子が五人に、孫が何十人とありましたから。」

「それから、どうしました。」

「死にました。確か八十を越していたように覚えています。」

呂翁《ろおう》は、得意らしく髭を撫でた。

「では、寵辱《ちようじょく》の道も窮達《きゅうたつ》の運も、一通りは味わって来た訳ですね。それは結構な事でした。生きると云う事は、あなたの見た夢といくらも変っているものではありません。これであなたの人生の執着《しゅうじゃく》も、熱がさめたでしょう。得喪《とくそう》の理も死生の情も知って見れば、つまらないものなのです。そうではありませんか。」

盧生《ろせい》は、じれったそうに呂翁の語《ことば》を聞いていたが、相手が念を押すと共に、青年らしい顔をあげて、眼をかがやかせながら、こう云った。

「夢だから、なお生きたいのです。あの夢のさめたように、この夢もさめる時が来るでしょう。その時が来るまでの間、私《わたし》は真に生きたと云えるほど生きたいのです。あなたはそう思いませんか。」

呂翁は顔をしかめたまま、然《しか》りとも否《いな》とも答えなかった。

[#地から1字上げ] (大正六年十月)

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986 (昭和61) 年10月28日第1刷発行

1996 (平成8) 年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971 (昭和46) 年3月～1971 (昭和46) 年11月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年11月10日公開

2004年3月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。